

ルカイ族の狩猟文化における 伝統と現代的変容

タイバン・ササラ：台湾・国立成功大学考古学研究所 教授
台湾屏東縣霧台郷×弟子屈町連携協定記念講演会



ルカイ族は台湾南部山岳地帯の先住民族の一つであり、長い間、中央山脈南端の森林、河川流域、集落の中で生活してきた。

ルカイ族にとって、狩猟は単に食料を得るための生業活動にとどまらず、森林に関する知識、動物への理解、タブー、分かち合いの倫理、そして社会関係を統合した重要な文化的実践である。狩猟者は、森に入り、動物の足跡を読み取り、季節の移ろいを理解し、共同体の規範を遵守することで、人、土地、動物、そして祖先との関係を維持している。獲物の分かち合いは、家族、親族集団、そしてより広い共同体を結びつける役割も果たしている。しかし、国よる法律の改正、自然保護政策、宗教的信念、災害後の移住、そして現代の生活様式の変化に伴い、ルカイ族の狩猟文化は新たな制約と変容に直面している。

本講演では、霧台郷のルカイ族を事例として、伝統的な狩猟文化の意義、現代における変化、そして文化的継承について紹介する。また、狩猟権、土地との関係、文化の伝承といった先住民族としての共通の経験について、北海道のアイヌの友人たちとの対話の場を設けることを目指す。
(タイバン・ササラ)

日時：2026年6月30日(火)18時30分から20時まで(予定)

会場：弟子屈町公民館 2階講堂

主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

GRID(先住民・文化的多様性グローバル研究ユニット)

共催：弟子屈町教育委員会

